

# 通信小海

## 神になり代わるもの



牧師 水草修治

「地震はひとりの人間も殺さなかった。殺したのは、我々が建てた家だ。」五年前のイラン大地震のとき、瓦礫の前で老人が語ったことばを、マグニチュード七・八の中国四川大地震の倒壊した建物の惨状を見て思い出した。文明が人を殺した。

以前、日本人は、「あれは中国のお粗末な建物の話で、わが国の耐震技術は世界一だから、大丈夫。」などと思われていた。しかし、阪神大震災を経験し、偽装問題が次々と発覚する今日、本気で大丈夫と思っている人は少ない。中国のニュースでかき消されてしまったが、実は、五月八日茨城県沖を震源とする震度五弱の地震で、福島第一原発2号機で3カ所の水漏れが見つかり、うち1カ所は排水管から278ベクレルの放射能を含む水25リットルが漏れた。わずか震度五弱でこんな事故が起きるのが原発の現実なのである。いったい大地震が起こった時にはどうなるのだろうか。

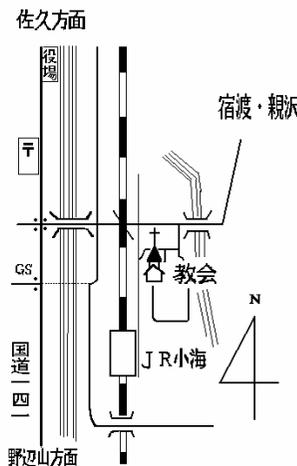
〈今月の御言葉〉  
「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」(マタイ六二四)

三十年以内に起こる確率が八十四パーセントという東海地震(M8)の想定震源域の中央には浜岡原発がある。発生確率九十九パーセントの宮城県沖地震(M7.5)の起こる場所には女川原発がある。

ところで、今般、洞爺湖で地球温暖化をめぐるサミットが開かれようとしているが、そこで首相は、二酸化炭素排出量の少ない原発はクリーン・エネルギーであるから、これをもって地球温暖化を実現するとか、さらに諸国にわが国の原発技術を提供したいと発言する予定なのだそうである。二酸化炭素の

日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治  
会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三五五 二七  
千三八四一一 二二 二六七九二四七七六  
〒振替005300 61683

## 見晴台の教会へどうぞ



## 集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後七時半から八時半

\*海尻・川上・南相木で毎月家庭集會をして  
います。

\*個人的な聖書勉強や個人的なご相談に  
も乗ります。

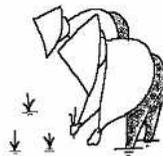
排出量は少ないであろうが、放射能排出量はどうか。放射能量は広島型原爆の千倍。浜岡四号機ひとつが爆発して放射能が風下に広がっただけで、ガンによる死者は一九一万人。首都圏で失われる不動産資産は千兆円に上り、世界恐慌が起こる。放射能汚染では復興もできないから、首都圏三千万人が難民となる。

数字が大きすぎて、ぴんと来ないほどである。文明が発達し巨大化すればするほど、その被害もまた巨大化してしまうのである。

なにが根本的問題なのだろう。イエス様のことを思い巡らしていたら、「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」(マタイ六二四)ということばに思い当たった。イエス様は、カネというものは神になり代わって偶像化されてしまつ、そついう危険なものなのだと言われたのである。世界中が今自由市場経済原理主義のために引きずりま

わされている。人間も商品として扱われ、商品価値のない者は生きていく意味がないとされる。地球も商品として扱われ壊され、住むことが難しくなってきた。いや、そんな大きな話でなく、ごく身近なこととして、遺産相続をめぐつて兄弟とは一生口を利かなくなつてしまつたというような話は、どこにでも転がっている。

偶像でも文明でもカネでも、神ならざるものを神とするとき、私たちはこんなしつぱ返しを食つことになる。



## 海尻で家庭集会

六月二十日(金)午後七時四十五分から井出博彦さん宅で。 96 2534

## 南相木でも家庭集会

六月十八日(水)午後三時から  
日向の中島悦子さん宅です。どなたもどうぞ。 78 2047

## 畑を借りて食糧づくり

### 野宿者支援

五月十八日、野宿者で働く気もりもりの人たちが、好意で貸してもらつた小淵沢の畑で、長ネギの世話と、大根とカブの種まきをしました。昼食の献立はたけのこ飯。みんな何とかが自分で立とうとしていますので、よろしく応援してください。

△送付先▽小海キリスト教会にお持ちくださるが、

南牧村社協へ。

〒384-1302 南牧村大字海ノ口966 1

5 南牧村社会福祉協議会気付 山谷農場

\*着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に「木曜午後送付希望」とお書きください。

山谷農場事務局(藤田 寛) 小海町芦谷ヒルサ

イドコーポ 一 二号室毎週金曜土曜はあります。

電話090・1436・6334

〒384-1302・7866・2088

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

カンパニ振替 一四 四 五三七九六

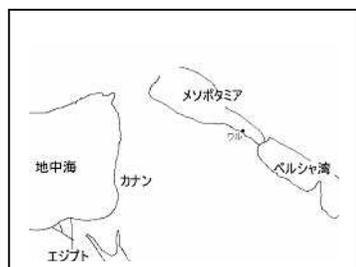
アブラハムの生涯

# 桶狭間

## ＊歴史の激流

紀元前二千年の世界で、文明の先進地はオリエントだった。オリエントは毎年大河ナイロが運ぶ沃土で農耕文明を発達させたエジプトと、チグリス・ユーフラテスという両大河には生まれたメソポタミアという二つの文明圏と、両者をつなぐ回廊としてのシリアないしカナン地方から成っていた。

アブラムはメソポタミアの都市ウルの出身だが、今は、カナンに移住している。当時カナンの低地には、ソドム、ゴモラ、アデマ、ツエボイム、ベラといった都市国家が並び立っていた。カナンの都市国家の王たちは十二年間西方のメソポタミアのケドルラオメルという大王に貢物を納めていたが、国力をたくわえるにつれて、独立を志すようになっていった。そこで、彼らはカナン都市国家連盟



を結び、ケドルラオメルに対して反旗を翻した。

ケドルラオメルは、自らの手勢だけでカナン連盟軍と戦うのは不利と見て、近隣のメソポタミアの大王たちを誘い込み、連合軍を編成。第十四年自カナンの地に遠征をしてきた。カナンの弱小な連盟軍はメソポタミアの大連合軍の敵ではなかった。鎧袖一触、カナン連盟軍は壊滅し、ソドムとゴモラは陥落、全財産と全食糧を略奪され、住民は奴隷とするために連れ去られてしまう。

ところで数珠繋ぎにされた捕虜の列の中にアブラムの甥ロトと家族が含まれていた。「ああ、アブラムおじさんが、『神の裁きがある。ソドムに近寄るな』と警告していたのはこのことだったんだなあ。」ロトは胸のうちで嘆いた。彼はソドムの近くに天幕を張り、家畜を放牧していたが、やがて妻や娘たちがソドムの派手で淫蕩な文明的生活に惹きつけられ、けつきよく、一家で町の中に住み着いてしまったのだった。西方の大軍が攻めてくると聞いたとき、すぐに逃げ出せばよかったものを、ぐずぐずしているうちに家族もろとも捕虜とされてしまったのである。

長々と続く捕虜の数珠の一粒として、日中五十度を超える砂漠の道を何百キロも徒歩で行かねばならない。生きてメソポタミアにまでたどりつける可能性はいくばくもあるまい。ロトは不安でいっぱいだった。

## ＊奪回

さて、ロトのしもべのひとりが番兵の目を盗んで捕虜の列から抜け出し、命からがらマムレの榎の木にあるアブラムのキャンプに駆けつけて通報した。

「アブラムさま。わが軍はメソポタミア連合軍と衝突すると、王は逃げ出して総崩れ。ソドムとゴモラは陥落し、全財産と、全住民は略奪されました。甥御のロト様も捕虜とされてしまわれました。」

予想していたこととはいえ、アブラムは「何をぐずぐずしていたのだ。ロト。」と齒噛みしないではいられない。後ろ足で砂をかけるように、恩義あるおじのもとを去った甥ではあったが、それでも救出に向かわねばならぬ。アブラムは覚悟を固め、一族郎党を緊急召集し、屈強な男たち三百十八人を得た。とはいえ、メソポタミアの大軍団に比べれば、お話にならないほど多勢に無勢であった。

だが、アブラムには勝算があつた。すでに帰途にあるメソポタミア軍は莫大な戦利品の荷駄と多くの捕虜を引き連れているゆえ、もはや軍としての敏速な運動はできない。また連戦連勝の軍隊はおごつて気が緩むものである。事実、通報に来たロトのしもべによれば、メソポタミア軍は夕べには勝利の美酒に酔いしれ、深夜にはろくに歩哨も立てず泥のように眠りこけているという。

アブラムは手勢を率いて、泥酔のあげく寝静まつたメソポタミア軍に対して夜襲をかけた。しもべたちは黒い影となつて敵陣深く侵入し、ひそかに捕虜たちの縄を解き、すべて整えてから、鳴り物つきで猛々しくときの声を上げた。作戦は図に当たつた。連合軍の将卒どもは暗闇の中でなが起こつたかわからず、恐怖にとらわれて、同士討ちを起こし、算を乱して千鳥足で敗走したのである。アブラムは夜明け前まで敵軍をカナン北東のダンまで追撃し、そこで作戦を終えた。完勝だつた。

アブラムは、みごとソドムとゴモラから奪い去られた全財産とすべての捕虜と奪回した。もちろんそこにはロトとその家族たち

も含まれていた。

#### \*誘惑と勝利

アブラムが王の谷と呼ばれるシャベの谷までやつて来ると、ソドムの王ベラが威儀を正して、アブラムを迎えに来ていた。昨日まで新参の遊牧民の族長にすぎなかつたアブラムは、一夜明けて、輝かしい凱旋將軍となつていた。ソドムの王が、王の谷でアブラムを迎えたのは、今後はアブラムをカナンの地の諸侯の一人として遇しようという意思の表現である。

これはカナンの社交界デビュウのチャンス。が、実は悪魔の誘惑だつた。ソドムの腐臭は天にまで届いていた。メソポタミアとエジプトの間を行き来する隊商は、東西の文物をこのカナンの地の諸都市にもたらし、特にソドムとゴモラの風俗は爛熟を通り越して腐熟していた。彼らと付き合いをしていくならば、早晚アブラムもまた聖なる神のみこころの道から肉欲の谷底に転落してしまつたであらう。

ところが、そこにシャレムの王メルキゼデクという不思議な人物が現れた。メルキゼデクとは「義の王」という意味。彼は

真の神に仕える高潔な祭司王であつた。メルキゼデクは、権威をもつてアブラムにパンと葡萄酒をふるまい、かつ彼を祝福する。

「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られたいと高き神より。あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。」

アブラムは、はつとした。ソドムの王は「凱旋將軍アブラムに誉れあれ」とほめそやすであらうが、祭司王メルキゼデクはアブラムではなく、彼に勝利をもたらした神に栄光を帰したからである。アブラムは、得意の絶頂にある者を好物とする悪魔の罠から救われた。

淫靡な化粧をほどこし金のイヤリングをした男ソドムの王ベラは赤い舌をちらつかせながら言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取つてくださいな。」

しかしアブラムは応えた。

「私は天と地を造られた方、いと高き神に誓う。糸一本でも、くつひも一本でもあなたの所有物から私は何一つとらない。それはあなたが『アブラムを富ませたのは私だ』と言わないためだ。」

